

で尚多くの研究を要する。支持電解液として NdCl_3 を使用し温度を規定してほぼ中性に行えば定量に利用し得るが共存イオンの影響が顕著であるためそれを考慮せねばならぬことは実用上大なる欠点である。

終りに臨み種々御助力をいただいた京都大学農芸化学教室教授、東京大学工業分析化学教室笠木求氏、旭硝子株式会社研究所植村四郎氏

の場合には普通に製造された薬包につき穿孔内に正常に装填された場合を考えるのであつて、異常に多くの水分を含有せしめたものや密度を広い範囲に変動せしめたもの等については考え

は殆んど生じなかつたにかかわらず硝爆は完爆して残 留を認めなかつた。

実験	薬径	薬包量	本数	総薬量	方 法	爆轟伝播の成否	製造月日
1	32						

